

的介入はそれを意味している。

二月総長選挙に向けてそれは更に強化されるであろう。日帝の教育機関として存在している全国の大学に、日共総長を選出することを闘いの方向としている彼らはブルジョワと手を取り合っ

て現教育体系を維持する役割を果たすのである。彼らの、大衆運動を利用しての反革命運動を我々は断じて許すことができないし、

彼らの武装突撃隊に対しては、我々の革命的武力の結集によって粉砕していかねばならない。そうしてのみ、万年安楽粉砕、学園闘争勝利の闘いは勝ちとられるからである。

日共民青、新聞社不法占拠糾弾、存心無解放の闘いの中で、結集した数百名の大衆的な闘争部隊をもって全学共闘会議(率)は結成された。

全立命の学友諸君、全共闘(率)は、寮、各学部クラス、サークル等の諸同志連の組織である。現社会、学園の一切の矛盾を拒絶せんとする諸君、全共闘に結集せよ。(全文)

【資料】③

法一回生Bクラス有志宣言

一回生Bクラス19名

立命館の皆さん、私達は12月13日、それ以後の暴力事件に対してここに訴えます。私達はこの立命館大学においてあるわたしたちの暴力に

対し、なんら生産性を見出せないという立場に立って、14日の暴力事件に抗議するとともに、学友会のある一途の無形の暴力(挑発ないしは類似行為)に対しても反対します。

この発端は、9名の新聞社入社問題と考えます。彼ら9名は一体何にもとずいて行動したのか、又何故この時点になって入社しようとしたのか全く明確ではありません。さらに彼らの背後には

(後略)

一般学生集会12月16日議題事項

一、我々は今回の問題よりこれまでの無関心な態度を反省し、組織を持たぬ一個人としてこの場に来たことを確認する。

一、我々は暴力、組織的暴力(挑発)行為、暴力行使(ゲバルト)は絶対許さない。

一、今回の問題は、我々が無関心なるが故に発生し、発展した。従って今後、我々は学園内外のいかなる問題も、積極的に知り

考え、真の民主立命建設に努力する。

一、今回の問題の本質は、日共系、反日共系の対立のみならず、学友会、我々一般学生に対する圧力である。この点に関しては、学友会の自己批判を要求する。

一、中央パートの地位にある新聞社は、その学内における責任に鑑み、これまでの不備な点に対する批判を認め、今後全学的な立場にたつて紙面に反映させると大塚編集局長は我々に確約した。

一、我々ここに集まった者は、クラス討議を積極的に関き、この集会の成果を生かしていく。

13日以後、毎日、校庭は騒然たるフンイキの中、大民主王様でつまれた。こうした声明は同様な集会の成果としてあいついで公表されるが、このビラは、16日の一千名に近い規模の集会において確認された一般学生の意思を17日に公けにしたもの。

全共闘(率)は、13日の存心無、占拠、解除のち、教組や二部学生の包囲から脱出するため、武装したまま全員がデモ行進して外へ出て以来、朝、集団で学内へ入り、夕方、集会を終えたと河原町通をデモ行進して出町へ帰るといふスケジュールができた。今では考えられない、百人余りの武装集団を先頭とする五百人前後の無届けデモは、立命館闘争の性格を反映しているものだ。14日(土)は、清心館前を民青が制し、全共闘(率)は清心館前で集会を行ない、中村学生部長が出席する。その朝、法学部の学友が、朝、ビラを配って、民青につかまらなりのけがをさせられる。

16日(月)は、代々木系の総動員による全学集会を、集えられた行動部隊が完全に粉砕しぬき、全共闘(率)集会へ加えられた様々な妨害をはねのけ、これ以後、清心館前広場を獲得する。18日には、全学集会が双方で企画されていたが、代々木は、職員をダウンさせ混乱の余韻を残すかのようであるのに、上昇気運の全共闘(率)は一般学生のほとんどを加え、68年最大の三千人集会を開く。日大全共闘の中村君の機をうけ集会はよりあがり、かつてない二千人デモを実現し、意気はあがった。民青は、二千人ほど入れる大教室に百人たらずで拡大五者会談になるものを開くが、この事は、キャンパスにいた中間派学友の大半が、全共闘(率)デモに合流し、ひとり民青のみが残されたのだということを示している。新聞社闘争の一週間の総決算は未公認の全共闘が堂々たる集会をもったこととわかる。

二、波紋／立命館民主主義への初源的問いへ

事態の、意外なしかも深刻なる進展に驚いた代々木民青は、自己の支配的な支配下にある五者共闘会議(生協理事会・労組・教職組)と(二部学友会)とりわけ教職組を通して、事態の収拾に狂奔する。五者共闘会議の教職組の発言は、「紛争の平和的解決を」ということであつた。だが教職組等という、いわゆる「平和的解決」なるものが、いかなるトリックを内に秘めた政治的効果を期待するものであつたのか。

それはのちに明らかにされるように、新聞社問題の本質と事実を全く権力的に歪曲しながら、自己に向けられた広範な学生の批判を巧みに暴力批判という一般論に解消させ、やがてこれを全学共闘会議準備会等の題材、ヘルメットに結びつけることによって、反全共闘の大合唱にすりかえるということであつた。